

## ■ 2008 年度 卒業論文要旨 ■

Company town 小坂の再生：  
鉱業から金属リサイクル業への転換

今泉 志帆

本稿では秋田県鹿角郡小坂町で進められている金属リサイクル業の現状と地元経済活性化の可能性について考察した。

小坂町は小坂鉱山で栄えた町であるが、鉱業衰退後は、処理が大変困難な黒鉱の製錬技術を活用し、多くの貴金属で構成されているリサイクル原料から希少金属を抽出する金属リサイクル業に転換した。事業主体は DOWA ホールディングスの子会社である小坂製錬を中心とした周辺 DOWA グループ 13 社である。また、小坂町には金属鉱業研修技術センターが立地しており、県をはじめとした公的な技術研究機関によってサポートを受けている。

小坂の金属リサイクル業では、黒鉱処理の遺産としての技術と施設が地域に蓄積されていることや、リサイクル関連施設が集積しネットワーク化されていること、周辺住民の合意が得やすく新事業を起しやすいくということなどが優位性となり、世界でも例がない複合リサイクル製錬所を形成している。これからはまだ回収ルートが確立されていないリサイクル原料のルート開拓や、産学官の協定、アジア諸国とのリサイクルネットワーク化などが課題となっている。

雇用や地元経済への影響は評価すべき点が多く、希少金属がますますこれからの社会における需要が高くなること、循環型の産業であるため長期的な安定が見込めること、同業他社が多くないことなど、金属リサイクル業を取り巻く状況を考慮しても新産業として地元根付き、発展していく可能性は高いと考えられる。

「道の駅」と過疎地域の活性化：  
愛媛県旧広田村「峡の館」を事例に

太田 今日子

山間地域における過疎・高齢化の進行は止まるところを知らず、それは私の故郷である山村、愛媛県旧広田村においても深刻な問題となっている。では有効な観光資源のないこのような過疎地域の活性化は、望めないのだろうか。そこで私が注目したのが、1993 年から国土交通省によって進められた「道の駅」制度である。ドライバーの休憩施設として提案された道の駅は、現在全国に 885 駅設置されており、その緩やかな制度的枠組みによって多様な機能を持つ施設が存在し、道の駅めぐりのバスツアーも登場するなど、人気は高まっている。本研究では、都市部からの来訪者が多い道の駅の存在が過疎地域にどのような影響を与えているのか、広田地区の道の駅に併設された物産館「峡の館」の来訪者へのアンケート及び、出荷者への聞き取りを中心に考察した。

調査結果から、地域住民である出荷者については、商品の販売額によって道の駅に対する認識はさまざま、経済的な場としてだけでなく、社会的な場（社交の場、娯楽の場）としても機能していることがわかった。また来訪者の多くは松山市から来ており、これには「峡の館」が「道の駅である」ことが大きな要因となっており、広田地区は観光の目的地ではなく、休憩所及び買い物の場として利用されていることが明らかになった。

道の駅に併設された農産物直売施設は、その売上は大きくなくとも、高齢の農業者や生活改善グループで活動する女性にとっては重要な存在である。そして今後「道の駅」は、都市部との交流はもちろん、地域内での交流の拠点としても、その役割を増すと考えられる。